



一人の乞食が受けた神の恵は

...韓国・総合福祉施設「花の村」を見学して... 有田 士朗(東京まちだ)



韓国陰暦8月チュソクの日(お盆)にお墓参りで、村には人がいなくなっていました。カトリックの神父が村の橋の下に沢山の乞食が動けないでたむろしているのを見ました。一人の乞食が村に行ってもらってきた食事を横たわっている人々に食べさせているのに心惹かれました。

その人の名は崔貴童(チェッキードン)でした。名前の意味は“尊い男の子”という意味です。彼は青年の頃、結婚し幸せに暮らしていましたが、日本に連行され強制労働をさせられました。故郷が恋しくて逃げ出し、捕まって、殴る蹴るの暴行を受け、障害者になってしまいました。終戦後、故郷の村に帰ってきましたが、家は無くなり、家族も行方知れずになっていました。

村では、病んで動けなくなった沢山の乞食が、橋の下で食べるものもなく住んでいるのに目がとまりました。自分は障害者になっても歩けるので、食べ物を乞い求める力が残っているが、この人達にはその力もない。“自分に、食べ物を乞い求める力があるのは神の恵である” 崔貴童はそう思って、自分が神から与えられている“恵”を生かし、その人達のために働こうと思いました。そこで、村で食事を乞いもらって来ては彼らに食べさせていたのです。

神父はその姿を見て、この人はボロを着ても心の高貴な人だと深く感動し、自分もこの人達のために何かしようと決意しました。寒い冬の来る前に彼等が住んで暮らせる家を造りたいと思いましたが、彼の手元には1,600ウォン(160円)しかありませんでした。彼は教会で募金しましたが、十分でなく、更に全国で1ヵ月に1,000ウォン(100円)の会費で募金しました。沢山の人が神父の話に感動して募金に応じ、その人数は増加していきました。

初めは何とか冬を越せる家を建てました。その後、韓国の経済が好くなって沢山の募金が集まるようになりました。

韓国では、助けを求める人、病人を捨てる人、子供を捨てる人が多いそうです。それらの困っている人を助けるために、集まった資金で施設を作っていました。そして、その施設で働く職員や、ボランティアを養成するために必要な教育センターも建設されました。

そして現在の総合施設「花の村」へと発展してきたのです。花の中で、最も美しく幸せなのは人間であり、障害者も美しく幸せであるということから花の村と名付けられたそうです。

花の村には次の様な施設があります。

障害者施設 重度障害者施設 精神病院
老人療養院 ホスピス 乳幼児院 福祉教育センター

その運営には多くのボランティアが参加しています。10人のシスターが1日3,000人の食事を作っています。ボランティアや学生の手伝いが増加し、会社からは沢山の冷凍魚が寄付され、増加する施設の食事が作られてきました。現在は政府からの補助金もあるが、その額は極めて僅かだそうです。

花の村施設の入口近くに一人の乞食の銅像が立っています。世界で唯一の乞食の銅像です。それはボロを着ていても心の高貴な崔貴童の銅像です。

今年10月、私は知的障害者施設「シャロ-ムの家」から派遣されて、韓国の総合福祉施設「花の村」を見学して施設の運営方を学ぶと共に、施設職員の研修旅行の参考にするために韓国へ行って来ました。花の村という巨大な総合施設が国家資金ではなく、1,000ウォン(100円)の小額なお金を数百万人から集めた資金と、ボランティアの働きで運営されていることに大きな驚きを覚えました。そして今回の見学旅行はIAVE(International Association for Volunteer Effort ボランティア活動推進国際協議会)の日本支部と韓国支部(KAVE)の交流会議の一環として行なわれました。IAVEはワイズメンズクラブと同じ国際的団体で、私はこの団体を初めて知りました。花の村のボランティアについては、KAVEが深く関わって援助しているようです。その実情について知ることが出来れば、ワイズメンズクラブの運営の参考になるのではないかと思います。

(東京まちだブリテン 2008年12月)